

新

歌人群像

# 矢代東村

● 批判的人生派の歌

● 中野照子 ●



はじめに

「やしろ・とうそん」——このすぐれた先達歌人の名に、どういう字を当てるのかさえ、昭和二桁生まれの歌よみの中では知らない人が少なくないと思われる。「とうそん」の後輩に当たる白日报社（前田夕暮系）の人の中でもその傾向は否めない現実であろう。

矢代東村、わたくしがこの名に出会ったのは、米田雄郎主宰「好日」一九五二（昭和二十七）年十二月号の表紙の左下に「矢代東村追悼号」と黒く記されたその文字であった。ちなみに、わが師雄郎は同年一月に「好日」を創刊しており、その年の十二月号である。当時の粗末な用紙の、全二十九ページの薄い歌誌に、巻頭第一ページから七ページまでを追悼文に当てている。執筆者は渡辺順三、やじまかんいち 矢嶋歓一、とみながみつぐ 富永貞、もとだたつお 元田龍夫（よねだのぼる 米田登）、かわすすむ 香川進の五氏である。

「好日」誌上では、それまでに一度も東村の名はない。作品も同様である。この時期、東村はすでに治癒の見込みのない上顎癌と闘っていたのである。東村は同じ夕暮門の雄郎ととくに親交ふかく、また雄郎の子息の登が「詩歌」入社以来、東村の選を受けてきた。

だが、この追悼特集を編んだ真意は、近代歌人の一人として短歌史に足跡を残す歌人矢代東村の、六十三歳という早い死を悼み、その歌業を顕彰し、記録に残しておくための追悼特集であったにちがいないと、わたくしには沁みて思われるのである。

一八八九（明治二十二年）三月十一日千葉県夷隅郡東村字長志に生まれる。本名亀廣、号「東村」は生地由来する。なお、初期の筆名は「都会詩人」。

一九一〇（同四十三）年青山師範学校卒業。小学校に勤務。九月、東京朝日新聞に「朝日歌壇」発足、石川啄木が選者となる。作品を投稿する。

一九二二（大正元）年前田夕暮の白日に入社し夕暮に師事。

一九三三（大正二）年「詩歌」に「一遇より」の一連が掲載され、注目される。

## 清新な青年像

ここで作品をあげるが、その前にいま一つ記しておきたい。それは一九一一（明治四十四）年一月に啄木、土岐哀果創刊予定の「樹木と果実」が発行されずに終わり、同年四月に創刊された夕暮の「詩歌」に入社している。

余談ながら、雄郎も同じ道を歩んでいる。

はらだたしわが満足はいつまでもいつまでも明日があぶかりてあり

われを見て仔牛はなきぬふるさとの土蔵の前のひとと梨の木

梨の木の梨の少なく蟬ばかりなけるをきけば貧しふるさと

黒き帽子そつとかぶりてポケットに銀貨を入れて行けばうれしも

夕日夕日東京衛戍監獄のあかき煉瓦塀ゆけどもつきなく

品川の海はきたなし溝の如し溲泄船のちよきちよぎと鳴る

三十円の俸給をもらひ天皇陛下のありがたきことを教へ居るかも

春いまだ東京小児科病院の洋館のいろの青くつめたく

第一歌集「二隅より」（一九三六（昭和六）年・白日报社）よりあげた。一首目は巻頭詠であり、大正元年の作品はこの一首のみである。

東村二十三歳、青春期らしく、思索的、哲学的などと言えば大げさだが、若き精神は観念的苦悩のなかに、感傷に溺れず明日への希望をつなぐ積極的な青年像を見ることができ

次のふるさとの歌二首は、事実を直視し、素直に貧しいと詠いながらむしろ健全であり、なつかしさは、さわやかでさえある。

四首目については、夕暮がこの歌集に寄せている序から少し抜く。「黒い帽子を被つて、／黒い服をきて、／黒い靴を穿いた彼！／彼はニヒリストで、／エナメルのように光つて、／早いテムポで、／ぐんぐんと道を歩いてゐる。／さよりのやうに敏感で、……」。この詩文の一節には、「都会詩人」の筆名を用いた東村の一面を見事に射ている。

次に衛戍監獄の一首であるが、夕暮、雄郎も、茂吉にしても監獄を素材にしている。その建物はもとより、内部は、歌人の関心を魅き、歌境を誘う何かがあったことは言うまでもない。「ゆけどもつきなく」、東村のこのとらえ方は、深い嘆きがこもる。後に東村は弁護士を生業とするが、このフレーズがひとり歩きをして、どこか遠くでその作者と重なると思わせるのは、うがちすぎかもしれぬ。それより、次の品川の海の歌のほうに、社会的な視野を持つ作者、また、自然主義思潮を短歌に撰取し詠った夕暮の影響が見える。

「三十円の……」は、あきらかに天皇制批判の思想を核とした自嘲的ニュアンスの強い作品であり、東村の代表作品の一首としてよく

# 矢代東村

矢代東村、26歳のころ（1916年）



知られている。ところが、「大正元年の教員の月俸は教頭を含む上位四名が三十円であり、亀吉（東村）は二十四円、三年度（筆者注）この作品が詠われた年）も平均月俸の分布は変らない」と、「帝国文部省年報」に拠り考証、したがって、この一首は他者（上司）の教育姿勢を批判したものであり、自身のことではないと小野弘子（東村の長女）が書いている（『短詩型文学』二〇〇三年五号）。興味ふかいが、一首に主語が表記されていない場合は「われ」が主語、という暗黙の了解をしてきた歌よみには、即納得しがたい戸惑いもある。解釈は別の機会に譲ることにしよう。

最後の一首、上句の快い調べは、かの時代の雰囲気を感じさせる。下句の感覚には夕暮

が少し透けるが、東村の資質でもある。また、青春時代の多く共通する若く汚れぬ感性とも言えよう。「一隅より」には、多くの第一歌集が内包するように、複数の才能の萌芽が見られることも確かである。

次に、「別るる前」「別るる能はず」と小題のある計四十八首からあげる、サブタイトルに「——というへの砲兵中佐未亡人はつ 恋人のその未亡人——」とある。

吸ひ終へし卵の殻に似たる恋そをすつ  
るとてなほもまどへる

人間のかなしき秘密ごとごとくわれに  
知らしめし君と別るる

指きるも黒髪きるもわがために何する  
ものぞ別るといふに

このころただ相抱く一瞬を措きては  
君を憎むなりけり

かき抱く君がししむらひたすらにかき  
抱く君がししむら直し

一首目、自嘲がこもり個性的、二首目はこゝろに愛しい。愛欲に溺れても男性は一瞬のことであり、女性はそれがすべてという性差がおのずから表現されており、東村の率直な心情が表白されている、すぐれた愛恋の作品と

言える。

## 口語の歌

一九二一（大正十）年六月二小学校退職。この年、判事、検事並びに弁護士試験に合格。翌年、東京で弁護士開業する。

一九二八（昭和三）年九月二新興歌人連盟が結成され参加。十一月、無産歌者歌人連盟に加盟する。

一九三三（昭和八）年四月二「短歌評論」創刊、同人選者。

一九四二（昭和十七）年三月二治安維持法違反容疑で検挙され検事拘留五か月に及ぶ。五月二十五日、東京大空襲で自宅焼失、白日社に寄寓。十一月、浅草に移転する。

東村は一九一五（大正四）年、はじめて「詩歌」に口語歌を発表している。前掲の「春いまだ東京小児科病院の洋館のいろの青くつめたく」などに、その傾向が少し見える。また、上句と下句に分けて二行書きを試みている。

その後、一九二三（大正十二）年、「短歌雑誌」に多行式口語歌を発表しており、この型は没年まで続いたのである。

第三歌集『矢代東村遺歌集』（一九五四（昭和二十九）年・新興出版社）からあげる。

1923年8月初旬、栃木県・塩原に遊ぶ。後列左から、矢代東村、前田夕暮、北原白秋、橋田東声、手前から、吉植庄亮、夕暮の子息・透、矢嶋歎一



断然と

いひきることが少くなり、  
こんな僕ではなかつたと

思ふ。 「パンとバラ」一九二三—二六年

山すそに日は一ぱいに輝いて

藁家ところどころ。

梅ところどころ。

考へなしに、

何の考へもなしに、みんな

同じ方向へ

押されて行く。

検束。

検束。

また検束だ。

しかし思へ。 検束しきれないものを

みなが持つてる。

「熔鑪」一九二八—三六年

ボンボンダリヤの花。

こんな所にも

子供らは集つて、

紙芝居を見てゐる。

刑務所の

官舎の露路。

「列強の空軍」(アサヒグラフ臨時増刊)

一冊買つて来て、

さて君はなにを考へようと

する。

「反動時代」一九三七—四二年

聰明な人達は

申しあはせたやうに沈黙し、

実に効果的に

沈黙する。

昨日まで戦をほめし歌をもて今日懺悔

すと歌ふ面白

「大衆と共に」一九四六—五二年

戦は人を殺しぬ人を生かしぬ人を半殺  
にしぬ半殺憂し

ほかに、一九四三—四五年を纏めた第二歌  
集「早春」(四七)昭和二十二〇年・新興出  
版社)がある。

東村は啄木の影響を受けたと言われるが、  
破滅的・感傷的な作風とは一線を画している。  
常に体制への批判の目、一つの思想をバック  
ボーンに自ら行動し生涯を詠い貫いた。そし  
て己の主題の、よりベターな表現方法として、  
口語多数行書きに拠つたのである。また叙景  
歌、日常詠に見られる清新な抒情のなかに、  
東村の肉間的な優しさ温かさが溢れている。

一九五二(昭和二十七年)年九月十三日死去。

盛大な告別式には、「貴男の歌が好きでした」  
とひそかに焼香していった少なからぬ日雇  
労働者やモク拾いの姿もあったという。「民  
衆に愛され親しまれた先生、民衆の中に生れ  
民衆と共にある歌の生命、価値を思わないわ  
けにゆかない」と、米田登は追悼する。医師  
であった富永貢は、「ちよこんとかぶつた鳥  
打帽の下から人懐っこく笑っている顔と、顔  
中真白な繻帯に包まれ苦しんでいる顔が相交  
わる」とかなしむ。没後、五十三年が経つた。

(なかの・てる)「好日」編集委員